

## 戦争と国家、そしてナショナリズム

福田 宏 (hfukuda@juris.hokudai.ac.jp)

(法学部 321 号室・706-3784)

(相談時間： 4/28(水) 15 時～17 時)

ロバート・ケーガン, 山崎洋一訳

『ネオコンの論理 —— アメリカ新保守主義の世界戦略』光文社, 2003 年.

### はじめに —— アメリカとヨーロッパの根本的な相違

- ・「平和の楽園」なのか「万人の万人に対する闘争」なのか

イマヌエル・カント (1724-1804) とトーマス・ホッブズ (1588-1679)

『永遠平和のために』と『リヴァイアサン』(共に岩波文庫)

- ・自らの力の有無により、世界観も変わる —— 弱者の論理と強者の論理

### 1. 軍事力の格差

- ・第一次大戦の衝撃 —— ヨーロッパの弱体化

弱さから理想を生み出す試み —— 国際連盟の失敗、ミュンヘン会談(1938)

- ・第二次大戦の破局 —— NATO体制におけるヨーロッパのアメリカ依存へ

自由世界防衛の「責任分担 (バードン・シェアリング)」を拒否

- ・冷戦後の選択 —— バルカン半島でのヨーロッパの無能さ

軍事力よりも社会福祉制度を優先する！ —— アメリカの失望

### 2. 強さの心理と弱さの心理

- ・「金槌を持っていると、すべての問題が釘のように見えてくる」

「ならず者国家」 —— イソ、イク、北朝鮮、リビア、キューバ、シリア、スーダン。(1994/1～)

「悪の枢軸」 —— イラク、イラン、北朝鮮。(2002/1～)

- ・ナイフしか持たないヨーロッパ —— 熊に怯えるしかない

世論調査においても、欧米の違いは鮮明に現れている

- ・国際紛争の解決法 —— ハード・パワーか、ソフト・パワーか

アメリカは「良心を持った怪物」である

### 3. 超々大国

- ・クリントン政権下における微妙な亀裂

イラクの国際社会への復帰についての見方

1999 年春のコソヴォ紛争 —— 両者の力の差、ヨーロッパ側の「制約」

- ・結局、アメリカは「一国でやっていく」しかない

## 9.11 以降のアフガン空爆とヨーロッパの停滞

### 4. ポストモダンの楽園

- ・ヨーロッパは「ただ乗り」を続けただけなのか？  
軍事力の行使より国際法、威圧より誘導、単独行動主義より多国間主義
- ・「ライオンのようなドイツが、子羊のようなフランスの隣でおとなしく」している！  
マキャベリの倫理基準を否定、道義性を重視 —— ポストモダンの世界
- ・アメリカがヨーロッパにおけるカントの難問を解決している！  
アメリカが安全保障を提供し、世界政府の代替物（？）として機能
- ・ヨーロッパは内向きになってしまった。  
EU拡大の困難さ、治安の維持、域外に対する無関心。。

### 5. アメリカが作った世界

- ・弱いヨーロッパを作ったのは、実はアメリカ自身である  
パラドックス —— 米の傘の下で、欧州は権力政治を否定している
- ・アメリカの大きな責任負担  
イラクのフセイン、イランの聖職者(アヤトラ)、北朝鮮の金正日、中国の江沢民。。

### 6. 「欧米」はいまでもあるのか

- ・冷戦期における「欧米」の結束と団結 —— 自由世界を守るために  
アメリカは冷戦後もスタンスを変えていない —— 我が儘になったわけではない
- ・アメリカは「国益」を重視し、国際世論への配慮を弱めていく —— 現実主義  
ヨーロッパにとっても、一番重要なのは「ヨーロッパ」だ！

### 7. 覇権への適応

- ・9.11 以降、アメリカは「本来の姿」に戻ったに過ぎない  
「アメリカの大儀は全人類の大儀」 —— ベンジャミン・フランクリン(1706-1790)
- ・アメリカに「孤立主義」の伝統など存在しない  
イラクが「第二のベトナム」になった程度ではびくともしない！
- ・アメリカは「世界にとって大きな利点」になりうる！  
単独行動主義は不可避であり、二重基準もまた避けられない  
次の戦略的難問は中国である —— 9.11 以前からの既定路線

\*指定文献: ノーム・チョムスキー著, 鈴木主税訳『メディア・コントロール — 正義なき民主主義と国際社会』集英社新書(190), 2003. 5月14日の授業で使用予定(5月10日までに北部生協に入荷。660円)

1 回目レポートの指定文献（以下の中から一冊を選択。2000 字程度）

- ・ 酒井啓子『イラク 戦争と占領』岩波新書(新赤 871), 2004.
- ・ 池内恵『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』講談社現代新書(1588), 2002.
- ・ 桜井啓子『日本のムスリム社会』ちくま新書(420), 2003.
  
- ・ 門奈直樹『現代の戦争報道』岩波新書(新赤 881), 2004.
- ・ 高木徹『ドキュメント戦争広告代理店 — 情報操作とボスニア紛争』講談社, 2002.
  
- ・ 立山良司『揺れるユダヤ人国家 — ポスト・シオニズム』文春新書(87), 2000.
- ・ 芝生瑞和『パレスチナ』文春新書(370), 2004.
  
- ・ 藤原帰一『デモクラシーの帝国—アメリカ・戦争・現代世界』岩波新書(新赤 802), 2002.
  
- ・ 中村好寿『軍事革命（RMA）— <情報>が戦争を変える』中公新書(1601), 2001.
- ・ 加藤朗『テロ — 現代暴力論』中公新書(1639), 2002.
- ・ 加藤尚武『戦争倫理学』ちくま新書(382), 2003.